

報告3・東南アジアからヨーロッパへの視座

高谷好一

川勝さんからお前のはだめだよ、とっていただいた極めてスタティックな話をまたすることになる。御許してください。やはり、地域研究では、他地域との連関の問題を重視するのか、その地域の固有性、すなわち生態から話していくのかという両派があって、いつもこれが言い争うことになる。というか学者には皆得手、不得手がある。私はどうも連関というのが下手である。下手でもいいと私は思っている。と言いますのは、川勝さんは生態から人は離れるのだ、つまり人は猿と違ふし、ねずみとも違ふ、人間には文化があるんだ、とおっしゃる。この事自体がまた非常に大きな問題になると思うのだが、このことはまた別に機会があったらお話ししたい。ただ、いずれにしても川勝さんの話は大変おもしろかった。全てが東南アジアから発して行って、今又東南アジアへ投げかえされているという点が大変面白かった。これを経済のチームで話された。ただ、東南アジアそのものの本質はどんなものか、という話はあまりなかったように思う。それで私はその点に目を向けて見たい。陣内さんのお話にも少し反論したいと考えている。地中海世界には町でも、ある種びしっとした形式があると言われた。アゴラ、アクロポリスがあり、そして競技場がある。こういうのがびしっと型をなしてある。イスラームになるとそれが崩れる。にもかかわらずなお広場があり、マスジットがあって王宮がある。ところが東南アジアへいくと何かわけがわからない、ぐじゃぐじゃだ、と言われる。そのぐじゃぐじゃのいいところを私は申したいと思っている。

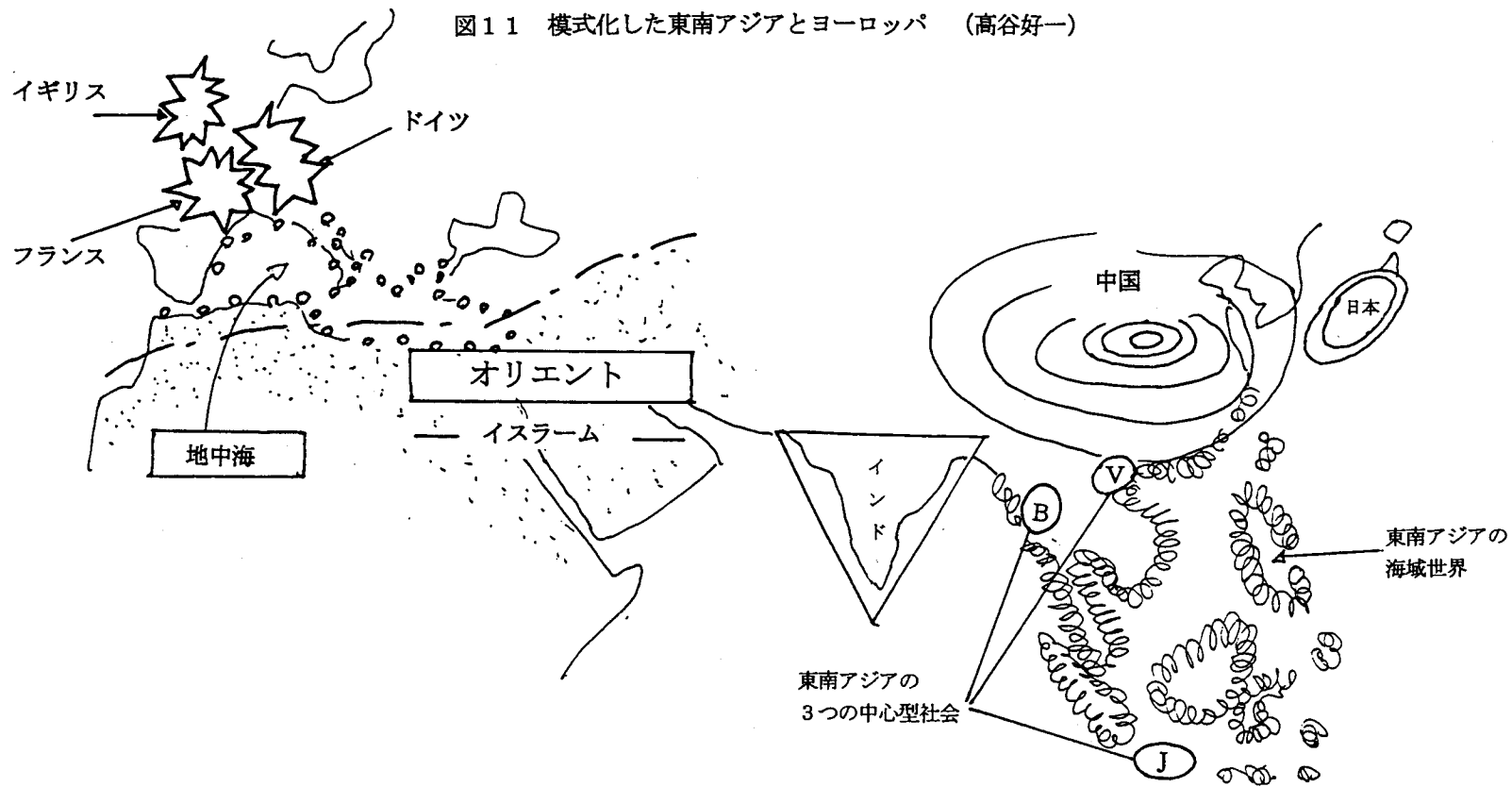
レジュメにしたがって私のヨーロッパ像をお話ししてみたい。そして、やはり最後には東南アジアと比較して、ヨーロッパと地中海がどう違うかという点に持っていきたい。私はヨーロッパと言って、最初アルプスの北のことを考えていた。途中で応地さんが地中海も入れた方がよい、とおっしゃったので、ここではヨーロッパに加えて地中海を入れた。地中海とヨーロッパは全然違ふと私は思っているの、私が両者に対してどういうイメージを持っているかというのもレジュメには書いた次第である。

地中海というのは私のイメージはものすごく大きなオリエントに対する小さい港群である。彼らは巨大なオリエントにやられたら困るという感じが強くあったのではないかと思う。さき

ほどもペルシャ戦争の話があったが、そこでも巨象のようなオリエントに対抗する小さなギリシャの港町、その港町の人達が持っていた恐怖心というものをひしひしと感じる。逆に、やがて巨大なオリエントが弱くなっていくと、あそこに行って食糧を手に入れよう、あの巨象を食いちぎりに行こうというようにハイエナみたいになるのではないかというのが私の地中海に対するイメージである。その次の時代というのは、ヴェネチア、ジェノヴァの時代である。この時代もやはりオリエントを意識している。この時期はオリエントというよりは正確にはイスラームである。そのイスラームを強烈に意識している。ヴェネチアは、未開のヨーロッパと発達したイスラームの間に入って運び屋となった港ではないかと思う。図11には、オリエントを描きその下にイスラームを書いている。その外側にこれに対抗する地中海世界都市国家群を描き入れている。

ヨーロッパはそういう地中海の伝統を引き継ぐといわれている。このヨーロッパというのは一つとしては捉えられないだろう。さきほど16世紀ぐらいから、陸指向と海指向がでてきたとおっしゃったが、私のイメージもこれによく似ている。カトリック圏の地中海文化、つまりラテン文化が最初に入ってくるころが、フランスだと思う。この現象に対しても私は生態を考えている。マルセイユからローヌ川にそって北上すると盆地がある。これがフランスになる。そしてその東にはゲルマンの世界がある。ここは、山がちな森の世界である。フランスを越えて北や西にいくとオランダ、イギリスなどの海の世界がある。代表的なものとしてはこのフランス、ドイツ、イギリスの3つを考えている。ラテン文化が入っていき根をはるのがフランスで、そこではルイ14世の時代には宮廷文化というものを中心にして、これこそ高級文化だというものを確立する。これはラテン文化の2次センターだと私は考えている。森の世界たるゲルマン、海の世界のイギリスはどう考えているかというと、ゲルマンはルイ14世の時代ぐらいまでだとやはり森の中に集落があって、領邦国家を作っていた。これはフランスの絢爛としているが墮落していく文化を見て、これはいかんというロマン主義を確立していった。他方、海の方では、アムステルダムあたりで産業を軸に経済発展をしていく海の人達がいた。これは後にイギリスにつながっていった。このように、環境に応じて、しかもそこに歴史的なプロセスがあるのである。そしてやがて国民国家というアイディアができてしまうので、こういう文化圏は国民国家という固い殻を持ったものになってしまう。しかし、ここに一貫してあるのは、オリエント、イスラーム圏に対抗しなければならない、自分達の国を守らなければな

図11 模式化した東南アジアとヨーロッパ (高谷好一)



らないというものであった。ヨーロッパの個というのが私にはよくわからないのだが、その後にはこの対抗意識があるのかなと思っている。守らなければならない個がある。その二つが近代に入った時に、結局は国民国家という殻の硬い幾つかの政治的なまとまりになったのではないか、そういうふうに私は見ている。

さて、東南アジアというのはどういう像を結ぶのか？これはヨーロッパ、地中海世界とは全く違う。まず、個というものもない。敵に対抗するというものもない。むしろ、緊張が少なく、そのかわりぐじゃぐじゃの世界ではないかと思う。ところで、20世紀末の今日の東南アジアを大局的に見た時にどういうふうに理解したら良いのかと申し上げると、それはやはりASEAN というものが中心だと思う。ASEAN という共同体がある。国の連合だが決して固い条約などで縛られたものではなく、いわば国同志の隣組みたいなものがある。これは実質的には海民の生活圏である。それが図11にあるようにもやもやと広がっている。そして、その周辺に3つ中心のしっかりした社会がある。Vのヴェトナム、Bのビルマ、それにJのジャワである。

ヴェトナムは中国に苦しめられながら、中国に対抗しなければならなかった。しかし、この周辺では、カンボジアを破り、小中華である。念のため私が言っているヴェトナムはハノイを中心とした北ヴェトナムである。南ヴェトナムは入っていない。南ヴェトナムは北ヴェトナムが侵略したよその国である。この北ヴェトナム小中華はなぜできたかという、紅河デルタというのがあって、米がたくさんできたからである。それでそこだけ人間がワーと増えた。漢書には100万とでている。嘘か本当かわからぬがともかくたくさんの人がいた。ビルマは上ビルマを中心としたイラワジの中流域には農業に適した地域がある。そこが水田地帯になっている。インドに似た水田地帯だ。そこに農民集団が入ってくる。もともとはチベットから入ってきた。チベットの好戦的で強い集団だった。チベットで築いてきたある種の価値観と上ビルマの農業生産が合わさって、ここにしっかりとしたビルマという国を作っている。もう一つはジャワである。ジャワというのはあの熱帯のジャングル地域の中であそこだけ木が生えていない。虫や、ばい菌が少ない。木が生えていると人は蚊とかにくわれて、死んでしまうことが多い。ジャワは木が生えておらず、ばい菌も少なく、おそらくは紀元前から人が随分入っていた。少なくとも6世紀になるとヒンドゥーの巨大寺院ができる。そういう所である。それ以後一貫して、火山山麓を豊かな農地にして、そこは燦然と輝くインド・ジャワ文化ともいべきものを

花咲かせた。そのインド・ジャワ文化は宮廷文化というべきものを有していた。デヴァラジャがいた。デヴァラジャ以下平民まで五段階の敬語体系を持つ文化を作った。そして彼らは周辺のジャングルの民を見下している。例えば、俺らは生野菜など食べない、野菜は必ず煮て食べるという、周辺の生野菜を食べるスマトラの人達などを馬鹿にする。あるいは、まわりに魚が一杯いるのに食べない。まわりの方はそれをスープで食べたりするが、ジャワの人にとってはそれはだめである。彼らは食べるのならディープフライである。魚のスープなんて、あんな魚臭いもの食えるか、という調子である。また、米が違う。まわりの人々は焼畑民でもち米をおこわにして食べる。ジャワは水炊きにしてうるち米を食べる。家の建て方が違う。まわりの人々は高床だが、ジャワの方は平土間のがっしりした家である。こうして、自分達はえらいと思っている。周りとは違うと思っている。

こういったヴェトナム、ビルマ、ジャワがあるが、これをのけるとあとは、ジャワ人に見下され、小中華ヴェトナムに搾取される弱い人達がたくさんいる。これは坪内さんが言ったように、町といってもせいぜいが1万に達するか達しないといった、いわばひなびた世界である。

このひなびた世界というのは、具体的には、多島海である。そして、そこにある島はほとんどが熱帯林で覆われている。熱帯林の中に入ったら死ぬので、人々は森の外に住んでいる。陸ではなく、マングローブの外側に住んでいる。海の中に棒を立て、その上に家を作って住んでいる。その家、集落そのものも50年も続いたらいい方である。よく動く。なぜ、動くのかというと、ここでは農業をしないので、さきほど話が出ていた香料を中心とした物産の採集だからである。資源が枯渇するともっと豊かなところに動いていく。この小人口で、動いている世界、これが本当の東南アジアの中心である。こんなところなので、国ができない。

第二次世界大戦後は国家建設が進んだ。東南アジアには10ヶ国ができた。しかし本当のことをいうと、こういうところは、基本的には国を作るには不適當なところなのである。なにせマングローブの先に家を建ててうろつきまわっている人達がいる地域である。ヨーロッパ風の国家を作るには不適當だ。これがASEANなのである。もう少し正確に言うと、そういう小さい集落の散在する中に、所々に少し大きめの港がある。大きな港はバンダルと呼ばれる。小さい集落はカンボンと呼ばれる。ASEANはバンダルとカンボンの世界なのである。そのバンダルはこの東南アジア地域だと10箇所ほどあると考えてよさそうである。カンボンは何千もあるだろう。

バンドルとは何かというと、極端に言えば外国人が作った港町である。普通はイスラームの商人が作った。ある時はペルシャ人、ある時はアラビア人が作った。そこにはモスクを建て、イスタナ（宮殿）を建て、港やバザールをつくった。陣内さんが言われたイスラームの機能を一応持った港町である。しかし、はっきりいうとこれは他国者の世界である。東南アジアの港町とは言いが、インターナショナルなネットワークの中で生きる人達、他国者の拠点なのだ。ところが、カンポンの住民というのは違う。うろろうしている地元の人達の集落である。この人達がおもしろい。この人達の生活を見ていただきたい。地中海の人達などとは全く違う。例えば、ギリシャ人はポリスをつくり、その中心のアゴラで演説をするエリートというのがいて、彼らは投票をする。民主主義という型もある。ところが、カンボンというのはそんなものと全く違う。カンボンには集落の形もなければ、選挙などのルールもない。また、巨大なるオリエントに対抗しなければならぬから一致団結しようなどといったことも全くない。一人ずつの人が自由に動いている。第一、一箇所には定住しない、渡り歩いてそして現役を終わってしまう。老人になったところでやっと定着する。彼らにいわせるとこれが人生の理想である。

ところで、私の感じでは彼らは強烈な男の美意識、男の美学を持っている。つまり、ちゃんとした彼ら自身の人生哲学を持っている。それは、第一にけんかが強いことである。けんかが強いといっても、単に体が大きく、剣術に優れているというだけではなく、呪術的な能力を持っているということである。強い男だと、彼ら持っている剣が勝手に飛んでいって相手を殺してくれる。そういう超俗的な力を持ったものが強い、と考えられている。男は森の中で修行に修行を重ねて、自分を清く、強くする。その結果神にかわいがられる人間、神から見て美しい人間になる。それが強いということである。神が加護してくれるからそうなるのである。そういう美学と哲学を彼らは持っている。

次に社会的な秩序はどうなっているかという、神にかわいがられるその度合による序列がちゃんとある。一番かわいがられるのが横綱で、その下に大関、関脇以下のランクがちゃんと定められている。決して定着しているものではなくて、動きまわっている、常に行った所、行った所で、番付けができる。その場その場で、それこそ二人関係の社会というか、ある種の関係ができて、それが親分、子分になる。強い者が親分、弱い者が子分という具合である。これらは、ヨーロッパが持っている堅固で定式化された社会の仕組みとは全く違った仕組みである。それでは秩序がないじゃないかといわれるかも知れないが、そうではない。カミの世界を

巻き込んだルールがある。極端にいうと東南アジアはそんな世界である。

ところで、この東南アジアを今少し違った側面から見てみたい。東南アジアの周辺には中国とインドがある。それはちょうどヨーロッパの東にオリエントがあり、後にはイスラームがあったというのと同じだ。その中国は中華世界というのを作っていた。ある意味では東南アジアはその中華世界の周辺化であった。中国の人達はそう言った。中国の方からすれば天子を認めるかどうか重要だったのである。中国の人達は東南アジアの連中も中国の天子を拜んでいると思っていた。だが、東南アジアの人にとってはそんなことはどうでもよかった。それで、認めるということにしておこうという生き方をした。彼らにとっては巨大権力など、どうでもよかったのだ。もっと個人ベースで生きている。こういうことだから、同じ海の民といっても、あのペルシャ戦争のようなことはやらない。ペルシャが攻めてきて、サラミスの海戦をやらなければならない、というようなことは、東南アジアには全くなかったし、今後もそういうことはありそうにない。なにか、もやもやとして捉えどころが全く理解してもらい難いかもしれないが、東南アジアのバンダル・カンポン世界というのはそういうものなのだ。

それから、もう一つインドというのがある。これとの関連も見ておこう。インドというのは大文明圏で、確かに東南アジアのインド化という現象を起こしている。東南アジアはインドの影響を受けている。しかし、よくよく見ると東南アジアの本性を変えてはいない。インドから何が来たかという、石造の寺の建設とかそういうものが来ているだけである。最も大事なカースト制というのは導入されていない。すなわち、一般民衆の生活には影響がない。精神文化という面からみると、ほったらかされているという感じである。そのほったらかされた東南アジアは、実際には執拗に自分の世界を保持し続けている。神から見てもきれいな人間であらねばならないという自己研鑽の生き方、それを中心にした社会秩序、それを持ち続けるのである。これが極めて大きな東南アジアの特徴だ。

それともう一つ、バンダルにいる異人達は、また別種の特質を持ち続ける。彼等はあまりえらそうなことを言っていたらまわりからやられるので、柔軟に生きのびていくという処世術を身につけていく。へいへいと、頭を下げといた方が得ではないか、ということで、「柔よく剛を制す」の知恵がある。私は近江商人なので、そのところはよくわかる。近江商人というのは、お侍が来るとへいへともみ手しているが、あれは何も侍に負けているわけではない。ああしておいた方が有利だからだ。バンダルの人達もそういうところがある。考えてみると、そ

ういうものがあらねば、世の中はぶつかりあってけんかばかりになる。ああいう柳に風があるので、うまくいっているのではないだろうか。

東南アジアというのは端折って説明してきたが、こうしてヨーロッパや地中海とは全く違う。すでに見たように、ヨーロッパは全てにわたって定型的な規範、イデオロギーをがっちり持っている。一方、東南アジアにはそんなのはどうでもよろし、というところがある。融通無碍の適応性がある。陣内さんがネットワークのお話をされた。イスラームをネットワークだとおっしゃった。確かにイスラームはネットワーク型であるが、東南アジアのネットワークはこれと違うと思う。もっと本質的にネットワーク的だ。イスラーム社会が商業ネットワークというもので特徴づけられるとしたら、東南アジアのそれはもっと生活全体がネットワーク的だ。第一に個人が動いている。そして、その都度新たなるネットワークを作っていく。レジメにはネットワークではなく、ネットワーキングと書いている。常に作り変えられる融通無碍の関係、それをネットワーキングと書いているのである。これは立本さんの用語である。地中海のネットワークと東南アジアのネットワーキングはこうして違う。ここはなかなか難しいのだが、そのところを理解することが極めて大事である。別の言葉で言えば、がっちり形を決めてしまう自形性と他人まかせの他形性みたいなものになると考えている。

北ヨーロッパでは森の中に町ができた。森と町であるとさきほど陣内さんがおっしゃった。おそらくそうであろう。にもかかわらず、町からは合理的思考がうまれてきている。他方東南アジアでは基本的なところで町が欠如している。加えて合理性を欠いている。だから、圧倒的に汎神論的世界である。

さらに近代に入ると、ヨーロッパは近代国民国家を作って、それが機能してきた。東南アジアも国を作らされたが、本当はちょっと苦しい所がある。そもそも国として本当にうまく機能しそうなところは、さきほど申したようにヴェトナム、ビルマ、ジャワだけである。他のところでは、国は作ってみてもあるが、実際はもっとアモルフラスというか、もっとボーダーレスというか、男の美学で動いている個人とバンダルの経営者が織り成す融通無碍の世界である。それがASEAN だと思う。ヨーロッパと東南アジアの対比を象徴的に示そうとすれば、それは近代国家対アモルフラスなASEAN だと言える。次に資源量の問題がある。ヨーロッパの貧しい資源、東南アジアの豊かな資源というのはさきほどから話題になっている。東南アジアはやはり何とんでも豊かな資源を持っていると思う。これをこれからどう使うかという問題が引

っ掛かってくる。

質疑応答

家島 今、高谷さんが説明されたヨーロッパの捉え方について、いろいろと反論もあるかと思うが、どうでしょうか？

陣内 私の話し方が誤解を受けた面があるかもしれない。東南アジアの融通無碍で、だけれどもうまくできているという点はよくわかる。その点ではヨーロッパとかなり違うと思う。しかし、私もイスラーム、ヨーロッパの中でも地中海にこだわってやっている中にどこか日本、アジアと共通する面があるのではないかという直感がある。それはつまり、ヨーロッパの北の方で16世紀以後どんどん展開していったそこから近代の空間のモデルもできてきた。イギリス、フランス、ドイツやアメリカが今の近代都市を作る路線をひいていった。その過程で19~20世紀初頭の植民地都市とか日本の明治以降の都市に対してインパクトを与えた。こういう近代が生み出したのと違う都市のあり方を私は模索している。他方で、日本のことをやっている。江戸、東京がマスタープランがないけれど、結構融通無碍な価値観で都市を作ってきたのではないかと、という思いで研究し

てきている。そしてそれと関連させながら、ヨーロッパの中で北と南、つまり地中海がどう違うのか、そして同じ地中海の中で、イタリアを中心としたラテン系とイスラームがどう違うのかという点を考えている。最近は、個人や集団のビヘービアや、イスラームのやぐざの世界が日本で研究されてきている。イタリア、スペインが持っているあまり合理的ではない人間と人間の関係は、度々グループができては消え、又再編成されるという具合で、固定したネットワークではない。そういうところまで含めると、我々にとっても親近感がある。つまり、合理化しない、普遍的にならない体質を地中海は持っていると思う。そのところを空間、場の論理として、もう一度きちんと認識したいと考えている。それと東南アジアは全然違うシステムで動いているというのはよくわかったが、高谷さんがおっしゃるほどかけ離れていない、ということを強調しておきたい。

角山 陣内さんのお話は地中海に焦点をあてられていた。高谷さんもヨーロッパと地中海を二つ区別された。しかしながら、高谷さんのレジュメの3番目、二つの地域の比較というが、地中海がない。ヨーロッパに括らな

いで地中海を入れて、比較する方がよい、というのが今の陣内さんの御指摘だと受け止めた。ヨーロッパをやっている者から見ると、ここには一番大きな点が抜けているのではないかと思う。つまり、高谷さんのお話の中では、発展とか変化はどう捉えられているのか？ヨーロッパの特徴は、発展変化である。東南アジアの場合、発展や変化はどうなんだろう？ぐじゃぐじゃというのはよくわかるが、ぐじゃぐじゃとして停滞しているのか、ぐじゃぐじゃとして発展しているのか、その辺のところをはっきりしていただきたい。発展するのであればどういう発展をしているのか、しないのであればしない、とはっきり言っていた方がいい方がわかりやすい。

高谷 私もよくわかっているわけではないが、残念ながらものすごく発展すると思う。ぐじゃぐじゃとしながら、川勝さんのいうように太平洋時代に乗り出すと思う。しかし、それはせんといってくれ、それの方が東南アジア的です、というのが、私のイメージです。

角山 発展はするけれども、発展してもらったら困るということだろうか？

高谷 そういうことです。

角山 それはどういう発展ですか？

高谷 経済発展。

角山 高谷さんの話でどうして工業化がでてくるのだろうか？ヨーロッパには工業化

が出てくる論理がちゃんとある。高谷さんの言う東南アジアには工業化へ発展する合理的な要因がない。それならば、どうして現在のような工業化がでてくるのか？

高谷 これからはやはり川勝さんがおっしゃったように、国際的なネットワークの時代になるだろう。そのネットワークに絡まって工業も出てくる。

角山 ぐじゃぐじゃという形で工業化していくとすれば、主体的にそれを作り出したのではなくて、今国際的とおっしゃったが、国際的というか、日本の資本やヨーロッパの資本に利用されて動いただけであるという意味のようだが。

高谷 そうです。実は海域世界には昔からその手がある。歴史を見ていくとそのことがよく分る。ぐじゃぐじゃ地域は、いわゆる国際化の時代にもものすごく活況を呈することがあった。おそらく一番最初は、1~3世紀の扶南時代である。その時東西交易の拠点として、ものすごく伸びた。シュリーヴィジャヤというのが次にある。これは8~9世紀。その次はマラッカの時代。そういうふうにかの波があつて、その都度大発展している。だが、いずれの場合も担い手はみんな外国人であった。バンドルというのは、そういう国際化の時代に外国人が活躍する場である。今度もバンドルが外国人を受け入れてやるだ

ろう。そういうことである。自らによる工業化というものは考えていない。バンドルの特性をものすごく発揮して発展するのではな

いかと考えられる。いわゆるシンガポール型であろうか。ジャカルタがすでにそうなっていると考えてよいだろう。